

世界のものづくり : 創造のキッカケを動詞で試みる

著者	小林 繁樹
ページ	154-157
発行年	2009-03-11
URL	http://hdl.handle.net/10502/4329

世界のものづくり——創造のキツカケを動詞で試みる

新たな視点から民博の所蔵資料に光をあてたい。

千家十職の方々の仕事内容にふさわしい動詞を抽出し、内容が連続するように組み替えてみる。そうして抽出された「叩く」「鑄こむ」「捏ねる」「削る」といった行為・身ぶりから、世界のものづくりをながめてみると……

小林繁樹 こはやしげき

特別展「千家十職×みんなばく」は、かなり向こう見ずな目論見から始まっている。日本文化の用と美の、一つの極致ととらえることのできる茶の湯の道具、千家十職の道具を丁寧で紹介したうえで、それらを語り口として、茶道具が世界各地の多様な文化と出会ったとうなるのか、どんな関連が示され、何が分かり、そしてどんな発想の広がりか期待できうるのかを試みようというものである。

茶道という枠組みのなか、しかも十職という茶道具を代々にわたって制作してきている方々が、世界各地から収集し収蔵してきた民博の資料を実際に手にして、どのように感じ理解し、それを題材としてどのような新たな作品を創作するのか。これがこの特別展の目玉である。

それは同時に、民博が創造への契機、さらには発想の源泉となりうることの証明であり、文化資源の重要な情報源であることの証左でもある。そのため民博側でも十職の方々の視点とともに、またある場合は並行して創造活動への情報提示を試みた。特別展の第三の

テーマである「手仕事を動詞で考える」は、その答えの一部である。

ここでは十職の仕事内容に深く関わる「動詞」ごとにコーナーを分けて、民博所蔵の資料を展示した。日本語の場合、動詞でとらえることが創造の可能性をより広げることに関わりと考へてのことである。さらに資料の抽出にはコンピュータによる検索結果を多用している。この場合も当然ながら、検索のキーワードは動詞を軸にしている。

そしてこの小文では、私たちが試行した、動詞を基にして展示の資料を選択した考へ方と方法を述べることに力点をおくことにする。特別展の名称「千家十職×みんなばく」のなかの×(かける)という記号が示すように、この展示は十職と民博が合作することで生じる相乗効果を期待しての、なによりものづくりの創造性、創造にいたる可能性についての展示であるからである。

そのような訳で、展示物の内容、つまり茶道具や茶道、手仕事あるいは職人技や職人、用や用の美、工芸、さらには民具や民芸といった事柄の、世界的な広がりな

かでの解釈や論考には触れる余地はありそうにない。

十職の、ものを見る目

茶聖と称せられ、三千家の祖にしてわび茶の完成者である千利休は、美を鑑別できる目利きの力に加えて、美を新たに発見する力である目明きの働きを充実させていった^①。他のものになぞらえて表現する見立てについては、京都の桂川の漁師が使っていた魚籠いさごを花入として用いたという「桂籠花入」がある^②。目による創造である見立ての時代をへて、六十歳から一氣に創作の道を歩み始める利休を、熊倉功夫は自らデザインする時代として刺激的にまとめている^③。そのなかで、阿弥陀堂釜を創るとき、利休は釜の形を紙に切り取って釜師の与次郎に渡し、作らせた。しかもその際、釜肌は「カツカツと荒々しく仕上げよ」と伝えたという。

また今回、展示に参加する釜師である十六代大西清右衛門は「楔形文字粘土板」と題するエッセイのなかで、釜の鑄型にへらを使って文様を彫刻する「へら押しをする作業」が、粘土板に葦のペンで楔形文字を刻む、その刻み方ととてもよく似ている、と触れている。そして刻まれた文字が何かを伝える力をなんと強く持っていることか、と感嘆する^④。その大西は自身の展示コーナーで、楔形文字の粘土板を創造意欲をかきたてるものとして選別し、青銅で作られたラオスからの資料である銅鼓の上に置いて展示している。

紀元前四千年にもさかのぼる古代オリエントで使用された文字の書き方と自身の釜作りの仕事を一瞬のうちに関連させてしまう直観力と洞察力に、私は正直、あきれてしまった。さすがに千利休の時代から幾百年も

の間、日々、創作に心血を注いできた人たちである。

十職の方々は自身の創作のキツカケとする民博の資料を、展示場と収蔵庫を熟覧しながら探していった。ふつう資料を探す場合は、アフリカの皿というように特定の目当てをつけて規則的に探すのだけれど、今回の目的は創作の着想探しだったので、あえて無用な制限を設けずに目の力を優先した。民博では標本資料の効率的な収納方式として、カードやコンピュータでの管理を前提にして、基本的には受入れ順に棚置きしている。これはある意味でカテゴリー性がなく、その分、制約から解放されているから、十職の方々には刺激的な展開であつたかもしれない。

そしてそれに加えて、コンピュータで検索されたリストも参照した。それは画像のついた資料名のリストを基にしているものである。こうして土器や竹細工品、家具、布類はいうにおよばず、海図やら楽器、復活祭の装飾用卵（イースターエッグ）や仮面など、世界各地からの多数の人びとがさまざまな用途で使用している品物を選び出した。この資料の選び方は、見て感じ、あるいは見て理解して選ぶ、つまり視覚と感性に基づく直感や直観によつて選ぶ、そしてリスト参照の場合は資料名、つまり物の名詞に基づいている。

なぜ動詞なのか？

ところで、民博の資料を創造の糸口とする際、私たちはどういふ風に物を探し出すのだろうか。十職の方々のように見た目の姿形、印象からの直観で選ぶのか？あるいはふだん何気なくしている、腕とか籠というように用途が分かる物の名称を基にして候補例を出し

てみるのか？

見方を変えると見え方、見えてくる内容も変わる可能性があるならば、見方は多様な方が展望は開けやすいだろう。

そこで私たちは、民博の所蔵資料をまったく別な思考回路で、まったく別な方法を使ってアプローチすることにした。それが動詞による思考法であり、後で選別するにしても、まずは漏れのない探し方として、コンピュータを利用しての網羅的な、悉皆的な検索方法であった。単純で簡単な見方の変更である。この見方や考え方は、実は八杉佳穂や小林が十年ほど前から個別に考えていたことで、今回、その思いが呼応した。

八杉は言語学の専門家として、例えば中国語は動作を動詞の語彙として区別するが、日本語はそうではなく、ひじょうに抽象度の高いことばであるとする⁵⁾。そこで本図録の「博物館を創造に活かす試み」で説明しているとおり、日本語の動詞を使えば内容が豊かになり、連想に広がり得られるというのである。この考えは民博常設展示場の、二〇〇三年のアメリカ展示の改修時に具体的に実現させている。基本展示部分を食べる・着る・祈るという動詞でコーナー分けし、そのなかに歴史や多様性、相互の関連性といった多岐な内容の説明を織り込んだのである⁶⁾。

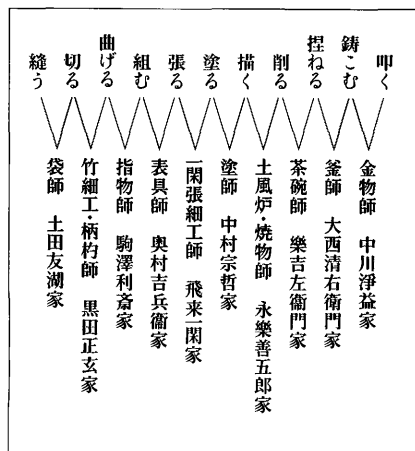
小林は事物を創出する際にいかにしたら創造性を高めうるのかという、発想の仕方について考えてきている。これには概ね二通りの手順がある。一つは、既存している「物」からの比較である。検討例を選ぶ際のふつうの方法として、用途が同じような物がまずは選ばれるだろう。模倣とか演繹的展開と言えるかもしれない。あるいは違うものを見て、己に逆照射する。文化人類学

をベースとする私の分野で見れば、世界各地の人びとが生み出した道具類の物の名前やら形態から参考例を探し出して、その理解を基にして創作を始める。これは十職の方々の補足的な資料探しと同じ方法である。

もう一つは異なった概念から、つまり見方を変えて考えてみるということである。十職の方々の、目で選ぶという見方もその一つである。例えば、ふつう道具とは用をなす人工物あたりと理解しているけれど、私は、道具とは目的を達成させる手段である、と定義している。それは道具を実存する物体としてとらえることはやめて、目的をめぐる関係とする、という考え方の転換を意味する。すると例えば人の道具の場合、その道具を使いこなす技術、つまり動作はもちろんのこと、使用状況や文化的背景など、時間もふくむ包括的で全体的な理解へ進みやすく、道具を人工物としてだけ考えるのとは異なった見え方も生じるのではないかと考えている⁷⁾。そしてこの視点から、名詞を軸にして事物を理解するだけよりも、動詞でも理解をする方がより包括的であるととし、さらには九年前には「道具」という名詞に対して「道具する」という動詞を造語して、道具の新たな見え方を模索している。今回の試みは、その格好な実験となった。

動詞で検索してみる

千家十職は金物師の中川淨益、表具師の奥村吉兵衛、竹細工・柄杓師の黒田正玄、袋師の土田友湖、土風炉・焼物師の永樂善五郎、茶碗師の樂吉左衛門、釜師の大西清右衛門、一閑張細工師の飛来一閑、塗師の中村宗哲、指物師の駒澤利斎の各氏である。これは当代の家元への



出仕順で、第三のテーマの展示構成では各職の仕事内容にふさわしい動詞を抽出し、内容が連続するように組み替えてみた。それらは叩く、鑄こむ、捏ねる、削る、描く、塗る、張る、組む、曲げる、切る、縫うである。それぞれおおまかに金物師、釜師、茶碗師、土風炉・焼物師、塗師、一閑張細工師、表具師、指物師、竹細工・柄杓師切ると縫うとで袋師に該当する。

民博の収蔵標本資料は二〇〇八年四月現在、二十五万七千八百六十点を数えるが、世界各地からの、収集年もさまざまな資料を網羅的に調べるのには、コンピュータ利用の検索が効率的でふさわしい。そこで叩くから縫うまでの動詞を軸に、関連する動詞を含めて四十八語（活用形はその幾倍かはあった）を全件、制作法・材料、用途使用法といった項目から検索していった。そしてヒットした二十二万件余からはば一万九千件の内容を確認し、千百四件を抽出した⁽⁸⁾。

検索の結果、予想どおり動詞を使わないと選ばれないに違いない資料がいくつも登場してきた。代表例は樹皮布、ステイル・ドラム、教会の置物、竹筒琴、毛糸絵、竜骨車、樹皮製カヌー、影絵人形、サケ皮の靴などである。

例えば樹皮布の場合、これは金物師の仕事にあたる「叩く」という動詞に関連している。金物師は端的に言えば金属を叩き伸ばして容器を作り、樹皮布は樹皮を叩き伸ばして作る布で、叩くという動詞が共通してヒットにつながっている。金属とか容器といった名詞だけの検索では引っかけかかってこないのである。この分だけでも創作のキツカケが広がったといえ、これは明らかに新たに視点を設けたことの結果である。

そしてさらに画像なども検討して候補資料を追加し

た。しかし会場の広さの都合もあって、全資料を展示する訳にはいかない。結局、本稿準備の段階で、展示目的や利用者を勘案しながら三百六十六点に絞り、さらに実際に展示する資料として百六十二点を選別することとなった。

波形あるいは曲面をもつ展示レイアウト

第三のテーマ会場では、展示台の形を波あるいは曲面を意識して構成したいと考えている。それは、叩くとか削る、描くとか塗る、組むとか曲げるといった、コーナーを仕切る動詞の内容の関連性や連続性、重なり具合など、連動やゆらぎといった状態を展示物の配置順だけでなく、展示台の形状でも表現したいからである。会場の特別展示館が円筒形をしていることも、この展示趣旨に適うだろう。

この展示をとおして、地球上における自身の文化を再確認し、世界各地の文化、用、技術、美のあり方などにも関心の幅を広げる手助けになれば幸いである。そして、それが今後の創造のキツカケとなりヒントにつながっていけば、望外の喜びである。

註

① 数江教二「茶の美」千宗左編「表千家」一九六五年、角川書店、三四―三五頁。

② 筒井紘一「利休の美 唐物と見立の時代」「利休―侘び」の創造者―別冊太陽 日本のごころ 一五五、二〇〇八年、平凡社、六四―六七頁。

③ 熊倉功夫「新しい美を創造する 千利休の目」千利休―侘び」の創造者―別冊太陽 日本のごころ 一五五、二〇〇八年、平凡社、一〇五―一三七頁。またエピソードの原文は、本書の五九頁に掲載されている。

④ 大西清右衛門「楔形文字粘土板」ふでは二一五巻、二〇〇八年、白鳳堂、一〇四―一〇五頁。

⑤ 八杉佳穂「漢字仮名交じり表記考」国立民族学博物館研究報告「三三巻」二号、二〇〇九年、一三九―二二五頁。

⑥ 八杉佳穂「アメリカ展示の新たな取り組み」国立民族学博物館編「国立民族学博物館三十年史二〇〇六年、国立民族学博物館、二二七―二二九頁。

⑦ 小林繁樹「道具関係論―道具の定義をめぐって―」道具学会編「道具学会第2回研究フォーラム研究発表梗概集」一九九八年、一六一―一七頁。

⑧ 検索、抽出作業は二〇〇八年八月に集中して六日間、実施した。八杉佳穂氏を始め、多くの関係者の協力をいただいた。ことに同僚の山本泰則氏には検索手法に関して、また砂連尾瞳氏には集計作業を含めてお世話になった。記して感謝します。
この作業をとおして、入力された情報がまだまだ足りないということがはつきりしてきた。例えば、資料に描かれている情景として「森のなかにある家の庭にニワトリが三羽いて、卵も生んでいる」とかの記述があれば、それだけで知りうる情報が飛躍的に増加する。今後の大きな課題だろう。